

第1章 伝説から現実へ蘇った楊貴妃の諸相

——天草市新和町の楊貴妃伝説を中心に——

鄒 双 双

一 はじめに

クレオパトラ、小野小町と並んで世界三大美女のひとりに数えられる楊貴妃は、たびたび日本で取り上げられて話題になっている。つい最近、女優の藤原紀香が中国の西安に行き、かつて楊貴妃が住んでいた場所と墓地を訪ねたことも、大々的に報道されていた（『朝日新聞（朝刊）』2010年10月8日付）。約1300年前の海外の女性が、現代の日本でもこれだけ語り継がれているのは、考えてみれば不思議である。これほど楊貴妃に関心を持つのは、彼女の傾国の美貌によるものだ、という結論はいささか早とちりかもしれない。それはともかく、むしろ古くから続いてきた日中文化交流という背景がさらなる大きな要因と言える。2010年7月に「周縁プロジェクト——天草フィールドワーク」に参加して「天草新和町楊貴妃伝説」と邂逅してから、はじめてこのように感じた。それから、調査を通して、楊貴妃と日本は実に深くかかわっていることが分かった。

したがって、本章は天草市新和町をはじめ、山口県や他地域における楊貴妃伝説を調査したうえで、楊貴妃に対する日本人の認識を考察し、その現代に賦与された新しい意義を考える。

二 新和町楊貴妃伝説について

中国の史書によれば、楊貴妃は756年に安録山の乱によって馬嵬で縊死された。『旧唐書・楊貴妃伝』に「禁軍の將軍陳玄礼は楊国忠と息子を刺殺後、後患を絶つために、唐玄宗に禍国の元である楊貴妃に死を賜ることを求めた。玄宗はやむなく、遂に佛堂で縊死させる旨の指示を下した」と明白に記載してある。また、『資治通鑑・唐記』には「太監高力士は唐玄宗の旨を受け、楊貴妃を佛堂で縊死させた」という記録があるが、楊貴妃が馬嵬の変以降を生き延びたという記録はない。それにも関わらず、楊貴妃が日本に逃れてきたことは伝承として一般的に知られている。そして天草にもそのような伝説が残っている。以下、天草市新和町における楊貴妃伝説を紹介して、その伝説が生まれた基盤を考察する。

1 伝説内容と由来

地域によって、楊貴妃関連の伝承・伝説の内容は違う。新和町の楊貴妃伝説は、新和支所前の石碑に刻まれた楊貴妃伝説によれば、粗筋は下記のようなものである。

昔々、宮地浦の山奥に、いつの間にか赤い柱の家が建ち、見とれるほどの美しい女性が住んでいた。ある年、原因不明の病気がはやったが、その美女がくれた『楊貴湯』という薬で村人は助かった。美女の話では、自分は楊貴妃という名で、国に乱が起きたが難を逃れ、海をさまよひ立の鼻に流れ着いた。今は「必ず迎えに行く」という皇帝の言葉を信じ、一日千秋の思いで待っているという。村の若者は、早くその時が来ることを天に祈り、太鼓を打ち鳴らし踊った。

何年か過ぎたある夏の日、にわか曇ったかと思うと雷が鳴り響き、ひととき大きな雷とともに山頂から竜が舞い上がり、大空の彼方へ消えて行った。村人達が楊貴妃の安否を気遣い駆けつけてみると、彼女の姿はなく愛用の「香袋」が置いてあった。

現在、屋敷があったとされる場所には「楊貴妃」の字名があり、竜が舞い上がった山には竜の穴があり「竜洞山」の名前がつけられている。

上掲の伝説には、幾つか興味深いところがある。

- ①女性 は 山奥 に 住ん で い る。
- ②女性 は 自 ら 楊 貴 妃 と 名 乗 る。
- ③疫 病 に か か っ た 村 人 を 助 け る。
- ④女 性 は 最 後 、 竜 に 乗 っ て 天 上 に 舞 い 上 ぐ る。
- ⑤村 を 去 っ た 時 、 「 香 袋 」 を 残 す。

こういった設定は、新和町にしかない特徴なのか、それとも他地域の伝承にもあるのか。第四節で、他地域の伝承と比較しながら述べていきたい。

それでは、新和町の楊貴妃伝説はどこから生まれたのか。

新和町楊貴妃伝説の発祥地は「楊貴妃」という場所である。新和町南部の宮地浦という地区の「小島」から山側に向かって、竜洞山の頂上に至るまでの広い範囲である。漢字表記は「楊貴妃」であるが、地元ではむかし「ヨキチ」と呼ばれていたようである（**地図1を参照**）。ただし、字名「楊貴妃」の由来は明らかにされていないため、それ以上追求することができない。

この楊貴妃伝説は昔から語り継がれてきたに違いないが、一般的に知られるようになったのは、およそ二十数年前からである。天草市文化財保護委員の平田豊先生が教育委員会に在籍していた間、宮南地区の古老に聞き取りを行い（1980～1986年度）、伝承を収集した。その結果、楊貴妃と思われる女性が広い屋敷を持ち住んでいたという伝承に行きあたり、それを基に「楊貴妃物語」を作ったという。そして、1988年頃、楊貴妃伝説が表に出たのを契機に、従来新和町で行われていた産業文化祭の名称が「楊貴妃祭り」に変更された。「楊貴妃祭り」は、楊貴妃にまつわる催しではなく、伝承を重視しなくてはならないものも含まれていない（平田先生の叙述）。とはいえ、「楊貴妃伝説」が一般の町民に親しまれることに拍車をかけたであろう。さらに、1992年に新和町青少年育成町民会議は、平田先生の「楊貴妃物語」にさらに内容を盛り込んで『しんわ楊貴妃物語』として刊行した。地の文は天草弁を、会話文は新和弁を色濃く出している。それに加え、鮮やかな挿絵も織り込んでいる。これによって、楊貴妃伝説は、た



新和支所前の「しんわ楊貴妃物語」

だ古老の間に語られるだけでなく、青少年から大人まで幅広く定着し始めた。

地図1



2 楊貴妃伝説がなぜ成立するのか？

伝説に語られたことは、必ずしも本当に起こった事実とは限らない。ところが、決して完全に出鱈目な作り話とも言い切れない。代々の住民に伝わって来たのは、なんらかの理由がある。本節では、新和町の楊貴妃伝説が生まれた根拠を探してみたい。

まず、天草諸島の地理的位置に注目しよう。周知の通り、天草は海に囲まれて中国大陸や朝鮮半島に面している。このような地理関係で古くから天草に中国や朝鮮からの難破船が来た記録が見られる。これは史料から確認できるが、その様子は伝説にも色濃く残っている。天草サンタ・マリア館の館長を務める浜崎献作先生のお話では、むかしどこからともかく、難破に見舞われた漂着民が山奥に隠れて生活することがある。非常に神秘的であるが、長い時間が経過すると、正体を知らない村人たちは、寺院を立てて亡くなった彼らを供養することになるようである。そのため、天草の所々の山地にそのような伝承を語る寺院が何軒もあるという。

『天草伝説集』には、難破船漂着を示唆するような伝説が幾つか記載されている。たとえば、江戸時代長崎港に出入りする中国船が、天草下島の西南方を通過していた時、暴風にあつて現在の苓北町坂瀬川の海岸に打ち上げたということから、その附近が「唐人岩」と名付けられたという（浜名-1986、193ページ）。

また、中国船員が命名したとされる河浦町富津の羊角湾は「琉球王使節の漂着地」と言われている。河浦町一町田、一町田川の川口から一本松附近まで、かつては入江だったと言われ、巨大な一本松に南蛮船を繋いだという（浜名-1986、234～235ページ）。このように、伝説は難破船が天草に漂着していたことを、史書と違う角度から語ろうとしている。

そうすると、楊貴妃が中国大陸から漂着してくる可能性がないわけではない。しかし、前述したように、史書によれば、楊貴妃は安録山の乱で玄宗と共に四川に逃亡する途中、兵士の強要によって縊死した。漂着の可能性は、また零に帰したであろうか。

ところが、1920年代に、著名な『紅樓夢』研究家の兪平伯は、『長恨歌伝の疑惑』などの著作において、天平15年（756）に死んだのは彼女の身代わりで、楊貴妃は逃れて各地を転々とした末、日本に渡り住んだと述べている。さらに、兪平伯の論述は、後の1986年に張方氏が援用し、楊貴妃は自殺させられたのではなく、難を逃れて日本に渡っていたという新説を、「楊貴妃係旅日本華僑」と題して香港『新晚報』に発表した。しかも、「歴史家の指摘と民間伝承から導き出された事実であり、間違いはない」と力説する。そのことは、1986年8月17日付の『朝日新聞（朝刊）』に取り上げられ、「楊貴妃は日本で死んだ!？」として報道された。報道の一部は以下のようである。

楊貴妃は日本で死んだ！？ 上海紙がウソのような新説紹介

【上海16日＝伴野特派員】玄宗皇帝とのラブロマンスで知られる唐の楊貴妃は、安祿山の乱で自殺させられたのではなく、難を逃れて日本に渡っていたという、うそのような新説が16日の上海・文匯報に紹介された。香港・新晚報に張方氏が発表したもので、「歴史家の指摘と民間伝承から導き出された事実であり、間違いはない」と張氏は言っている。

楊貴妃は、本名玉環。皇子寿王の妃となったが、玄宗に見そめられ、その妃となった。天宝……

張氏の新説は、『紅樓夢』研究家の俞平伯20年代に『長恨歌伝の疑惑』などの著作の中で天宝15年に死んだのは彼女の身代わりで、彼女は逃れて各地を転々とした末、日本に渡り住んだと述べたことを取り上げ、この解釈に魯迅の実弟である周作人も賛意を表明した、としている。周作人は日本留学中、山口県で楊貴妃の墓なるものを目撃した、と言っている。

また、日本の民間伝承の中に、楊貴妃の日本渡來說があり、張氏は彼女は兄の楊国忠の娘徐氏とその子供の楊欽を同行、山口県の瀬戸内海側に上陸したとしている。日本の女帝孝謙天皇は彼女の境遇に同情して手厚くもてなした。後に孝謙天皇が宮廷の政変に巻き込まれて、その座を追われた時、彼女はその復位に尽力したという。

張氏は、萩と久津の2カ所に今も楊貴妃の墓があり、彼女の子孫であることを証明する系図を持った日本人女性が存在する、と言っている。

俞平伯の著作は未見であるため、実際どのように論証したのかわからないが、『紅樓夢』研究者として、さほど論拠がなければ上記のような結論を出さないであろう。確かに、楊貴妃と玄宗の恋愛を描く白樂天『長恨歌』を検証してみれば、その中には明白に楊貴妃が死んだという文句が記されていない。しかも、「馬嵬坡下泥土中、不見玉顔空死処」（馬嵬坡の下泥土の中、玉顔を見ずして空しく死せし処）と書き、楊貴妃の埋もれた処が空塚であったことを記す。『長恨歌』は、中国だけでなく、日本でも愛読された。そして日本文学に大きな影響をもたらした。『源氏物語』の「桐壺」は『長恨歌』の影響を受けていることが定説となっている。また、『今昔物語』『十訓抄』『浜松中納言物語』『唐物語』から、江戸時代の川柳にいたるまで、楊貴妃を題材に挙げたものは数えきれない¹⁾。加藤蕙（1987）は、「日本の楊貴妃伝承は、「長恨歌」によることが多い。この長詩にみる玄宗と楊貴妃の愛の美しさは、多くの日本人を魅了してやまなかった。白居易を感動させた二人の貴人の行動、そして愛情が、日本人の心をゆりうごかさなはずがない」と述べている。同時に、『長恨歌』の楊貴妃の最期に対する曖昧な描写も、日本人に無限な想像を膨らませたのであろう。

総じて言えば、天草の地理的位置は、新和町の楊貴妃伝説誕生の自然環境を整え、『長恨歌』はその伝説を理屈として支えたことになる。

1) 竹村則行著『楊貴妃文学史研究』（研文出版、2003年）を参照されたい。

三 他地域の楊貴妃伝説

新和町以外で、日本の他地域にも楊貴妃に関する伝説が多い。それらについては、渡辺龍策『楊貴妃後伝』と加藤蕙『楊貴妃漂着説の謎』に詳しく論じられている。ここでは簡潔に他地域の楊貴妃伝説を紹介しておきたい。

愛知県熱田神宮の摂社の一つに内天神社がある。この内天神社の祭神は楊貴妃である。というのは、『仙伝拾遺』によると、「昔、唐の玄宗皇帝四百余州を治め、此日本を取んとて計給ふを、当社の御神しろしめして、仮に楊貴妃と現れ世を乱し給ひければ、日本をとる事叶わず」という（加藤-1987、31ページ）。つまり、熱田の神は、玄宗の日本侵攻を阻害するために楊貴妃に変身し、その色香で玄宗を眩まし、政治を崩壊させた。それで、日本侵攻という計画が失敗に帰し、日本の国難も未然に防がれた。したがって、内天神社で楊貴妃の霊を祀るわけである。

また、山口県油谷町の二尊院境内に楊貴妃墓という石塔が現存している。楊貴妃がここに漂着して間もない頃、死んでしまったという。この石塔については、天保年間（1830～1844年）に編集された「防長風土注進案」によると、唐の美女・楊貴妃の墓と書かれている（1987年9月16日付『朝日新聞（朝刊）』）。

しかし、山口県の楊貴妃墓説に対して、「楊貴氏墓誌の研究」（『日本歴史』第211号、1965年12月）を著した近江昌司は、1986年10月7日付の『毎日新聞（夕刊）』に発表した「楊貴妃漂泊——日本各地の伝説と八木氏の由来」に楊貴妃墓が八木氏あるいは楊貴氏の墓からの敷衍してきたものと論じる。その文の一部を抽出して以下に掲げる。

油谷町の楊貴妃墓はすでに防長風土注進案が述べているように、楊貴氏の墓がいつの間にか楊貴妃の墓の伝承をもったものである。

一体に古代氏族の八木氏が陽疑・柳沢と好字に書きかえることが続日本紀・和名抄に見えるほか、楊貴氏と書く例は、近世に奈良県五条市大沢で発見されたという天平十一年の年紀をもつ「楊貴氏の墓誌」がある（私は以上の伝承をもとに偽刻された墓誌と考えている）。狩谷斎翁はこれを八木氏墓誌に比定し（古郷遺文）、国語学的にその用法は誤りでないことは亀井孝氏は証された（日本歴史二一五号²⁾）。

そしてこの場合は、江戸時代の国学者・中山信名が、楊貴氏は楊貴妃に因んで記したと述べて以来、久しく唐風文化の憧憬を示すものと宣伝されてきた。しかし天平十一年（西暦739年、筆者注）にはまだ貴妃の位についていなかったことを岸俊男氏が指摘され、楊貴と楊貴妃は全く関係のないことが明らかとなった。

かくて、八木氏が楊貴氏に通じることと、貴妃漂泊譚がないまぜになって、日本の各地に楊貴妃の遺跡が出来上がるのである。なおその上に、楊氏もヤギ氏とよむ、楊も柳も訓はヤナギである。

2) 『日本歴史』第215号ではなく、正しくは第217号である。亀井孝の「楊貴氏につき語学のたちばから」、『日本歴史』(217) 1966年6月、68～74頁を参照されたい。

そこで楊柳と楊貴、ひいては楊柳観音と楊貴（妃）観音の相乗と混乱も生じる。京都の楊貴妃観音は、こうした側面をもっているのではないかと憶測している。

楊貴妃の墓は八木氏が楊貴氏に通じることと、貴妃漂泊説が入り混じって出来たものであり、それに、楊貴氏と楊貴妃とは全く関係がないと、近江昌司は主張する。しかしながら、近江が論説を発表して一年後、油谷町で楊貴妃が確かに死んだ物証が発見された、という報道が出た。1987年9月16日付の『朝日新聞（朝刊）』は「町の楊貴妃伝説が再燃」として報道した。内容は、以下のようである。

楊貴妃のものと思われる墓がある山口県油谷町の二尊院（田立智満住職）の物置から最近、端麗な中国女性の姿を描いた2枚の絵が見つかり、楊貴妃はこの町で死んだ、という伝説が裏付けられた、と地元は大騒ぎ。テレビ局まで「墓を掘らせて」と申し入れた。2枚の絵は1本の掛け軸に収められており、いずれも縦50センチ、横30センチ。（中略）二尊院の古文書によると、唐の天宝15年（756）7月、ひん死の美しい女性が同町に漂着、間もなく死んだので手厚く葬り、墓を建てたという。

ここでは古文書の記録と絵で楊貴妃伝説を裏付けようとした。伝説の信憑性に対して、歴史研究家と伝承者の意見が分かれるのは、もったもである。本当かどうかはともかく、山口県の楊貴妃伝説は、新和町の楊貴妃伝説と同じように、地元の人々の心に深く刻み込まれたであろう。

ちなみに、新和町や、名古屋市熱田、山口県油谷町のほかに、楊貴妃ゆかりの事物があちこちに存在する。横浜市金沢区の称名寺には、太真殿に掛けられていた珠簾というのが所蔵されている。また、和歌山には楊貴妃が使用したという湯舟があれば、長崎にも愛用の枕というのがある（加藤-1987、242～243ページ）。

四 新和楊貴妃伝説の特徴

上述した熱田と油谷町の楊貴妃伝説と比較してみれば、新和楊貴妃伝説には独特な特徴があることに気づく。

まず、新和の伝説では、楊貴妃が死んでいない。熱田の内天神社に祀られたのは、死んだ後の楊貴妃の霊であり、油谷町伝説にも楊貴妃が最後死んでしまったというプロットである。しかし、新和楊貴妃伝説には、死ぬどころか、山奥に何年間も住んでから、竜に乗せられて天上に舞い上がったということになった。山奥に住むこと自体が神秘的である。

そして、自ら「楊貴妃」と名乗り、しかも玄宗との約束を吐露するところから、女性は「楊貴妃」という身分を隠すつもりはないだけでなく、玄宗との関係までも公にすることを憚らない。

また、楊貴妃は、疫病から村人の命を助け、村の恩人になった。村の若者たちが、玄宗が楊貴妃を迎える時が早く来ることを、天に祈り太鼓を打ち鳴らし踊ったというエピソードも織り込まれた。つまり、新和楊貴妃伝説には、他の伝説にないドラマチックな性格が含まれている。この伝説から、良い人に報いられる恩返しという、伝説や昔話にしばしば見られる趣旨も読み取れる。



楊貴妃の願いを叶えた龍のいた穴とされている

容貌が美しく、善良で、恋愛を堂々と語ることができる現代風の女性である。国に禍を招く「傾国」美人という中国でのイメージに反して、新和楊貴妃伝説では、楊貴妃は村を救う「救国」美人となっている。「救国」したためか、死なずに玄宗との再会を暗示するように竜に乗って飛び去った。これは、他の楊貴妃伝説に見られない特徴であり、また人々を惹き付けて想像を馳せらせる興味深いところである。

ちなみに、新和町の楊貴妃像も風変わりである。「三千ノ寵愛一身ニ在リ」と歌われたように、楊貴妃は確かに絶世の美女であったようだ。一千二百年も前のことなので、真実の姿を見る術がないが、史書や小説などの記述から、豊満で華やかな感じの美女だったように推測される。このような容姿は後世に広く認識されている。しかし、2006年に新和小宮地みどりの村のそばに建てられた楊貴妃像は、高さ約1.6mほどで、台座約1mの上に立ち、羽衣風の宮廷衣装を身につけ、スマートでほっそりとしていた。美人のシンボルとして「撫でたら美人になる」といわれているが、正に現代版の楊貴妃と言わざるを得ない。それにしても、もしも楊貴妃が現代まで生きていたとしたら、この像のようになるであろう。新和町の人々は、楊貴妃がまだ生きていて、というメッセージを伝えたかったのであろうか。楊貴妃伝説が言い伝えられ、楊貴妃祭りが毎年11月に行われるということから見れば、楊貴妃は確かに人々の生活に溶け込んで、人々の心に生きていけると言えるであろう。

最後の指摘として、新和楊貴妃伝説には、竜が登場する。竜は中国では神聖な動物であり、中国の象徴とも目されている。もちろん、楊貴妃を載せた竜の行き先は中国である。従来の説では、楊貴妃は玄宗と死別するか、例え辛うじて生き延びたとしても玄宗と離れ離れになると思われる。しかし、ここで楊貴妃は竜に乗って消え去ったという設定は、楊貴妃と玄宗の再会を意味し、非常に円満な結末を迎えるわけである。

まとめて言えば、この伝説の中の楊貴妃は、



楊貴妃像



小宮地の誇り「楊貴妃」

五 楊貴妃伝説の中国への帰郷

ここまで新和町楊貴妃伝説を中心に、日本における楊貴妃伝承について紹介してきた。そして、これらの伝説は、白楽天の『長恨歌』によるところが多いということも述べた。つまり、伝説の起源を探し求めれば、中国にある。その一方、日本に生じた楊貴妃伝説は、日本国内にとどまらず、中国にも伝わり、大きな反響を呼び起こした。筆者は、この現象を「楊貴妃伝説の帰郷」と名付けたい。以下、そのような現象を検討する。

まず、2003年12月4日号の『週刊新潮』に掲載された「なぜか中国で流布する「山口百恵は楊貴妃の子孫」という記事に注目しよう。記事によると、ある山口さんという、沖縄出身の日本人が、家系図によって祖先が航海中失踪した「楊明州」という中国人であることを確認できて、それが中国で報道された。姓が同じなら同族という中国人の認識から、山口百恵は楊貴妃の子孫とされた。これは、同年11月に中国『人民日報』や新華社通信をはじめ、多数メディアのネット版に報道されたようである。また『週刊新潮』に、北京在住のある日本人ジャーナリストが「日中国交正常化30周年を記念して、楊貴妃の日本漂着伝説を題材にした新京劇が大々的に公演されましたが、これが楊貴妃と百恵さんの結びつきを連想させるきっかけになったのかもしれない」と述べたことも書かれている。つまり、楊貴妃の日本漂着説はすでに2003年の新京劇が取り入れており、多くの人々に知られていた。そこから、「山口百恵は楊貴妃の子孫」と言うまでに騒ぎ立てた。

また、2006年2月20日発行『人民中国』の「楊貴妃がつなぐ中日交流」という文章は、同年10月に東京新宿文化センターで上演される、中国歌劇舞劇院によるグランドオペラ『楊貴妃』では、楊貴妃が日本に辿り着いたというストーリーが加えられた。これは、監督の程波が油谷の楊貴妃伝説に心を打たれ、オペラ『楊貴妃』創作の計画を立て始めた、ということを書いている。

さらに、2010年4月に人気チャンネル「湖南衛視」から上映されたドラマ『楊貴妃』にも、楊貴妃が日本の遣唐使の助力で日本に渡ったという設定がある。監督の尤小刚は、渡辺龍策の『楊貴妃後伝』³⁾と、日本には楊貴妃墓と楊貴妃伝説があることを挙げ、それが出鱈目ではないと信じたからだという。

このように、2003年の京劇から、2006年のオペラ、そして2010年のドラマまで、それらの中の楊貴妃は、縊死せず日本に渡航したという新たな運命が与えられた。それは、ひとえに日本の楊貴妃伝説の影響によるものである。そして、ドラマの強い影響力によって、楊貴妃日本渡航の話はますます翼が付いたように広がっていくであろう。ひょっとしたら近い将来、この話が中国に定着するようになる可能性も考えられるであろう。

六 結びにかえて

本章は、天草新和楊貴妃伝説を中心に、日本における楊貴妃伝説、およびそれらの伝説が中国に与え

3) 渡辺龍策の『楊貴妃後伝』は閻肅によって翻訳され、1987年に『楊貴妃復活秘史』として河北人民出版社から出版された。

た影響を考察したものである。調査のきっかけは、天草フィールドワークの時、「楊貴妃ロマンの香る里」を書いた観光パンフレットが目に入ったことである。そして、調査の進展につれて、日本にこれだけ楊貴妃伝承が残っていることが分かり非常に驚いた。各地の楊貴妃伝承はそれぞれ異なるが、その背景に、『長恨歌』の伝播、遣唐使の活躍といった日中交流の歴史が語られていることは、共通点として挙げられる。言葉を変えて言えば、楊貴妃伝承が古代日中交流そのものを物語っている。さらに、新和町にあるように、楊貴妃伝説を新たに掘り出して、観光や、青少年教育などに活かすことは、楊貴妃伝説が背負った日中関係史を良い方向で引き継ぐことになるであろう。その意味では、伝説中の楊貴妃はすでに地元の実生活に参入していると言えるであろう。最後に指摘しておきたいが、楊貴妃伝説が中国に帰郷して、影響を呼び起こすことは、まさに今日の日中関係を物語っている。楊貴妃と日本の関係は、いちがいに「まゆつばもの」として、日中関係外史の片隅に葬り去ってしまうことができない。

最後に、中国からの留学生である筆者は、天草フィールドワークを通して、現地の方々と交流することができ、日本の歴史や風俗などについての認識も深めることができた。そのこと自体が一種の文化交渉と考える。特に本レポートを執筆するにあたって、以下の方々にお世話になった。新和楊貴妃伝説については、天草市役所新和支所の園田新木先生の斡旋によって、天草市文化財保護委員の平田豊先生にご教示を賜った。両先生に感謝の意を表したい。また、サンタマリア館の浜崎献作先生に貴重な情報を提供していただいたことに御礼を申し上げたい。

参考文献

- 荒木精之ほか（1978）『熊本の伝説』（『日本の伝説』第Ⅱ期 26）角川書店。
 小尾郊一（1987）『中国の英傑8 楊貴妃』集英社。
 加藤蕙（1987）『楊貴妃漂着伝説の謎』自由国民社。
 崔淑芬（2004）『来日中国著名人の足跡探訪』中国書店。
 竹村則行（2003）『楊貴妃文学史研究』研文出版。
 浜名志松（1986）『天草伝説集』葦書房。
 劉雨珍「楊貴妃」中西進、王勇編（1996）『日中文化交流史叢書 第10巻 人物』大修館書店。
 渡辺龍策（1980）『楊貴妃後伝』秀英書房。